

黒漆太刀 — 宝壽丸 —

日本風俗史学会 青梅市文化財保護審議会委員 齋藤慎一

現在、宝壽丸と称されるこの太刀には俱利迦羅と宝壽

の中世の大太刀は、明治四四年四月一七日、「黒漆太刀」

の名称で国宝指定を受けた。「武州御嶽権現御内陳御神寶」

一方、当社最古の万治二年（二六五九）二月八日の祭礼

役儀帳には、「御太刀の役人 一番くりから 太良兵衛

二番隠岐院（金銅長覆輪太刀） 観成院」とある。刀身の俱

利迦羅龍の彫刻から「くりから」とも称された。「谷合日記」享保一二年（一七二七）

三月八日条に、將軍吉宗の神宝上覧のため恒例の祭儀が一ヶ月延引、上覧四品の一つに

「俱利迦羅御太刀一振（是ハ日本武）とある。同年二月五日付江戸城より返却の神宝の受領書には「宝壽太刀 一腰」とあり、

この太刀には俱利迦羅と宝壽と二つの呼称があった。享保四年（一七一九）三月卅日付

「武州御嶽権現御内陳御神寶」目録には「寶壽 三尺九寸」とあり、これを裏付ける。古

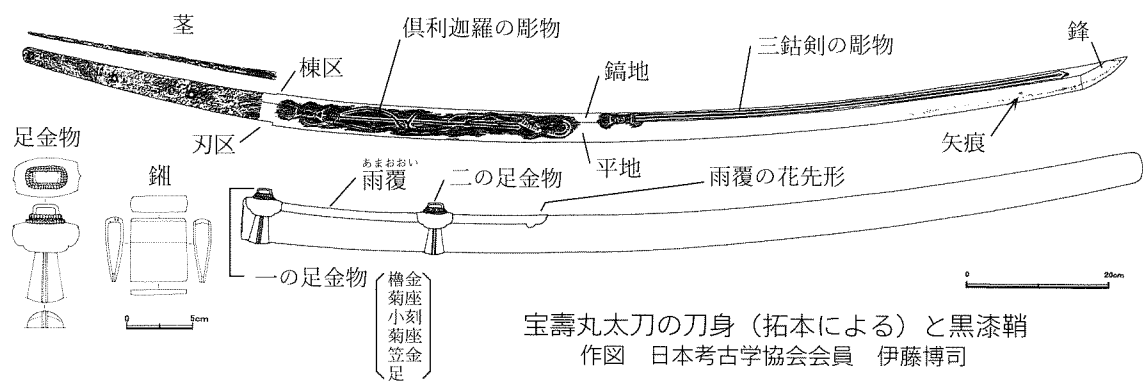
く当社の祭礼に欠かせない太刀として本殿内陣に伝えられたのである。祭神所用の伝承

があった点でも宝壽丸の宗教的存在感は重い。

身長118.7cm、刃幅と重ねの厚さは、柄本で幅4.69cm・厚さ1.01cm、刃区から60cmで厚さ0.67cm、幅3.67cm。長寸で幅広、重ねは厚い。重量2.67kg。反は深く、刃部は切先から62.3cmの辺で4.7cm、全体では切先から77.4cmで8.5cm。全体のほぼ真中で左右に反る。

南北朝時代の太刀姿である。丸棟、鎬造、柄本で鎬幅14.3cm、鋒の長さ6.0cmの大鋒。その長大豪壮な太刀姿は、伝足利尊氏の大鎧姿の騎馬武者像が、肩にかたげた鳥居反の幅広、大鋒の大太刀に、共通する。宝壽丸も長い茎が刃区から9.5cmも反り上がるが、反の中心は太刀の途中で、この騎馬武者が佩く、柄本反の革巻太刀とは対比的である。南北朝期の斬撃戦に対応しての形状である。騎馬武者像には足利義詮（一三三〇—一三六七）の証判が上部にあり、高師直（？—一三五二）像説が有力である。御嶽の宝壽丸の製作年代もこの頃であろう。刃こぼれと、鋒から15.5cm、刃先より1.5cmに鎬のある鏝が激突したような痕がある。鏝えは板目に柰目を交え、地沸つき、白け気味。刃文は互の目乱れに尖り刃・丁字風の刃。身幅に比し焼刃は狭く

小模様、小足・葉が入り、小沸つき細かく、砂流しかかる。茎は生ぶ、栗尻、鑢目僅に勝手下りと錐か。茎尻から1.3cm、13.3cmと24.3cmの三箇所に目釘穴がある。刃区より目釘穴の鎬の上、棟よりに浅い線で「壽」の字が確認され、その先に「寶」の字があるらしい。白け気味の鍛え、小模様の焼刃、丸棟など、地方製作で、奥州の宝壽の作刀である。その一方、佩表・佩裏一杯に配された俱利迦羅や利劍（三鈷劍）の図、彫技は細緻で、王朝風の龍、正しい儀軌の剣を刻む。研磨のため、線刻、毛彫が磨滅し、一見異様な図と印象されるが、稚拙な地方製作とは思えない。刃区まで余白僅に柄頭は位置し、剣は鎬に沿って平地に寄り、龍は身幅一杯に蛇体をくねらせ四肢を屈伸し、四爪各々は力強く剣を攔んで、龍頭は雲気を吐き剣先を呑まんとする。「集古十種」



宝壽丸太刀の刀身（拓本による）と黒漆鞘 作図 日本考古学協会会員 伊藤博司

が図示するように龍頭には逆立つ毛髪が線刻されていたと思われ、耳・角も僅に残る。二分裂した舌とも見える雲気が頭の背後に靈芝雲となって拡がる図は佩裏で確認でき、首に魚子を打った首輪を描く。腹部の筋ごとに魚子二点、四肢の節ごとに一点を打つ。復元すれば、厳島神社蔵平家納経の経箱の高肉彫龍の図様の系統に近いものとなる。鍛刀と彫刻とは別作で、実用ではなく宗教的所業が生じた時に施工されたと考えられる。三鈷柄の嘴付脇鈷・中鈷・単弁の蓮弁帯・約・鬼目帯など正確である。

俱利迦羅の剣と龍の長40.2cm、三鈷柄の握部は鬼目帯と蓮弁帯。龍頭から3.77cmおいて、鋒まで鎬と棟の間の鎬地に長65.2cmの三鈷剣を刻む。柄の握部は菊花半円二つ。刀身表裏を三鈷剣で埋めたのは宗教的要請のため、修験の靈山御嶽が図示するように龍頭には逆立つ毛髪が線刻されていたと思われ、耳・角も僅に残る。二分裂した舌とも見える雲気が頭の背後に靈芝雲となって拡がる図は佩裏で確認でき、首に魚子を打った首輪を描く。腹部の筋ごとに魚子二点、四肢の節ごとに一点を打つ。復元すれば、厳島神社蔵平家納経の経箱の高肉彫龍の図様の系統に近いものとなる。鍛刀と彫刻とは別作で、実用ではなく宗教的所業が生じた時に施工されたと考えられる。三鈷柄の嘴付脇鈷・中鈷・単弁の蓮弁帯・約・鬼目帯など正確である。